

富山大学人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センター

Center News

Center for Educational Research and Practice
Faculty of Human Development, University of Toyama

第33号

(2015年7月24日発行)



講演会「デジタル教材を活かす特別支援教育－自立と社会参加を促すiPadの活用－」, 5月

センターニュース第33号 目次

- | | | | | | |
|----|----------------|-------------------|--------|----|----|
| 02 | 巻頭言 | センターへの期待 | 学部長 | 鳥海 | 清司 |
| | 挨拶 | 教職大学院でのセンターの役割 | センター長 | 山西 | 潤一 |
| 03 | 挨拶 | 少しでもアシストできれば… | 客員教授 | 安井 | 俊夫 |
| | 挨拶 | 熱い思いと真剣な眼差しに出会う中で | 教職特任教授 | 山本 | 悦子 |
| 04 | 平成27年度の計画・ビジョン | | | | |
| | • 教育工学研究部門 | | | | |
| | • 学習環境研究部門 | | | | |
| | • 教育臨床部門 | | | | |
| | • 客員教授 寺西 康雄 | | | | |
| | • 客員教授 安井 俊夫 | | | | |
| 07 | 報告 | 内地留学を経験して | | | |
| 08 | 編集後記 | | | | |

センターへの期待

人間発達科学部 学部長 鳥海 清司



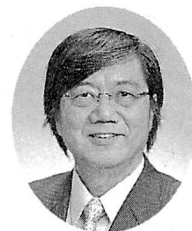
富山県内の3大学が統合してから今年で10年となり、統合の年に教育学部から改組されて設置された人間発達科学部も、もう10年の歴史を刻んできたこととなります。10年前に一般学部という位置づけにはなりましたが、教育というキーワードは一貫して人間発達科学部のなかで受け継がれ、一昨年行われたミッションの再定義においても、人間発達科学部は教員養成機能を有する一般学部であると記されております。

人間発達科学研究実践総合センターも現在の名称に変更して10年経つわけですが、その機能としては、教育臨床、教育工学、学習環境の3つの研究部門を有し、附属学校園との共同研究プロジェクトをリードし、子どもとのふれあい体験など地域の学校現場とのつながりを持つなど、研究と実践をととした学校課題の解決にあります。このような機能を改めて眺めてみますと、学部の持つ教員養成機能に大きく貢献しているのが人間発達科学研究実践総合センターであるというように私の目には映ります。

現在、富山大学として設置申請をしている教職大学院は、文部科学省より教員養成学部のない県と位置づけられた富山県を教員養成のある県へと位置づけを改める存在となります。富山大学においては、教職大学院が大学院レベルにおける教員養成の核となります。その一方で学部レベルの教員養成の中心的役割を果たすのは人間発達科学部です。教員養成をキーワードとすれば、教職大学院、人間発達科学部、さらには、人間発達科学研究科は相互に連携を図っていくことが必要不可欠と言えます。このような状況にあって、人間発達科学研究実践総合センターには、現在もっている機能を活かして、教職大学院、人間発達科学部及び研究科、教育の実践現場をつなぐハブとしての役割を担ってくれることを期待しております。

教職大学院でのセンターの役割

人間発達科学研究実践総合センター長 山西 潤一



念願の教職大学院の設置が最終段階に入った。設置申請が認可されれば平成28年4月に開学の運びとなる。国の教員養成、特に大学院レベルでは教職大学院がその中核を担うことになるという。全国の教員養成学部を持つ大学院で、教職大学院構想が始まった時、正直反対の意を唱えた。当時、既存の大学院の設置目的は高度な専門職能をもつ教員を育成するというもの。なんで新たに教職大学院が必要なのかという思いからだった。当時の文部省いわく、修士論文の研究テーマを見ると、とても学校教育に関わるものと思えないものが多すぎると。それでも、それなら大学評価を厳しくして改善を促せば済む話だと思ったものだ。しかし舵は切られた。未だ教職大学院が未設置だった全ての教員養成大学・学部で教職大学院が設置されるのだ。実践的な指導力・展開力をもった新人教員の養成、確かな指導理論と実践力・応用力を持ったスクールリーダーの養成が目的という。研究教員だけでなく実務経験豊富な教員も専任スタッフとなり、その任にあたる。

さて、大学の理論知と学校現場の実践知をつなぐ場として、当センターは発足した。学部改組で名前こそ変わったが、目的は全く変わっていない。学校現場が抱える現代的教育課題の解決に向け、学校の先生方と大学の研究者が協力し、より良い指導法や教材開発を行ってきたのだ。富山大学の組織上、教職大学院は全学組織に位置づけざるを得ないが、学部がその実質的な運営責任を持ち、センターも理論と実践をつなぐという本来の目的に照らし、教職大学院の研究センターとしての核になるべきだ。学部教育であろうと教職大学院であろうと、センターには、教員としての資質向上を目的に大学院で学ぶ教員、学部学生、それを指導する研究者や実務家教員からなる教育問題に関する熟議の場、共同の実証的研究フィールドとしての役割が益々求められよう。建物の設計だけでなく、そこに関わる教員の意識も重要だ。期待に答えられるよう環境整備を図っていききたい。

少しでもアシストできれば…

客員教授 安井 俊夫



私はこれまで中学校教育に長く携わってきました。また、その間教育センターにも勤め、教員研修の仕事に関わってきました。研修カリキュラムを考えると、大学での教員養成カリキュラムについても調べたことを思い出します。そして、この度4月より人間発達科学実践総合センターで仕事をする事になり、学生の教員養成に関わる機会を得ました。これまでの経験を生かし、教師を目指す学生のみなさんの力添えが少しでもできればと思っています。また、実践総合センターは、研究機関である大学と教育現場である学校とを結ぶ大切なところ。学校現場は大学の研究成果等、様々な支援を求めています。私は実践総合センターという素晴らしい職場で、学校と大学をつなぐ役割を少しでも果たせればと思っています。

昨年「世界の果ての通学路」という映画が日本でも上映されました。世界の辺境の地で暮らす子どもたちの通学の様子を記録したものです。その中に、ケニアの11歳の少年ジャクソン君と5つ年下の妹サロメちゃんの姿がありました。道なき広大な草原のなかを象やキリンなどに遭遇しないように、片道15kmの道のりを2時間かけて小走りで駆け抜けていきます。通学も命がけです。でも子どもたちは毎日目を輝かせて学校に通います。それは、彼らが、学校が「将来への源」であり、明日の幸せにつながると信じているからです。

学校、そしてそこで子どもたちの教育を担う教師、その仕事は子どもたちの明るい未来を拓く素晴らしいものです。そんな教師を目指す学生のみなさん、そして今学校で子どもの教育に一生懸命に取り組んでいる先生方を、私は少しでもアシストできればと、そしてそのために精一杯努力したいと考えています。

熱い思いと真剣な眼差しに出会う中で

教職特任教授 山本 悦子



第1回目の講義では、私なりの38年間の小・中学校での経験を踏まえ、具体例をもとに、教師のすばらしさや教師に求められることについて、思いの丈を語りました。事後感想には、

- ・いかに子供と向き合うかが、教師の頑張り所であり、使命、責任なのだと思った。思春期の荒れた子供の心や、小さいながらも我慢や悩みを抱えている子供の心に、どのようにアプローチし、その助けとなるか、いくつかのヒントをいただいた。教師の魅力が見えてきた。
- ・「鉄は熱いうちに打て」「真っ白なキャンバスにどんな色を付けるかは教師次第」の言葉が印象に残った。小学校教育の重要さを再認識するとともに、それに応えるためにももっともっと力を付けたいと思った。
- ・「一寸の虫にも五分の魂」「子供は家庭に学校生活を届ける記者」「心が笑顔の子供たちに」の言葉とともに、小さなヒビがどんどん積み重なって大きなずれになることも教えていただいた。アンテナを高く感度よく、子供一人一人のわずかな変化を見逃さず、誠実に向き合う中で、信頼される教師になりたい。

講義に真摯に耳を傾け、学校現場についての理解を深めたり、自分なりの目指す教師像を明確化したりしながら、熱い思いと真剣な眼差しを向けてきてくれた学生たちに出会い、私自身が身の引き締まる思いになりました。その後の志願票添削でも、集団討論でも、模擬授業でも、学生たちの姿勢は変わりません。

教師の道は、いつも平坦ではなく、時には困難な課題に直面し、悩んだり行き詰まったりすることもあります。この学生たちが近い将来教師となり、今の姿勢を大切にして次代を担う子供たちと向き合っていくのが楽しみです。そのためにも微力ながら力を尽くしたいと思います。

平成27年度のビジョンと計画

教育工学研究部門

教育工学は、教育改善を目的とした研究開発を行う学際的研究領域である。

平成27年度は、以下のような目標を持って活動する事を予定している。

- (1) 教養科目「情報処理」のカリキュラム開発と評価
 - ・総合情報基盤センターの教員と協力して情報処理授業を改善し、効果を測定評価する。
- (2) 小型コンピュータを利用した、教育プログラムの開発
 - ・学生を対象とした実習授業の教材開発を行い、実践的に評価する。
- (3) iPadを利用した教材の開発と評価
 - ・iPad向けのソフトウェア教材の開発環境を整え、学生用の教材を作成する。
- (4) 心理学基礎実験のカリキュラム開発と評価
 - ・心理学基礎実験のハンズオン形式の授業カリキュラムを開発し、実践評価する。
- (5) 心理統計学の教材開発と評価
 - ・既存のWeb教材を、新しい情報処理環境にあわせて改善する。

学習環境研究部門

平成25・26年度の2年間、授業におけるICT活用の方法についての研究と、それに関わる研究会・講演会を開催してきた。本年度もこのような内容を継続し、小中学校等の授業のために役立つ活動を進める。

【研究会の開催】

授業におけるICT活用では、パソコン、タブレット端末、実物投影機（書画カメラ）、プロジェクタ、電子黒板等の様々な機器を、授業のねらいに合わせて、効果的に活用することが重要である。また、パソコンやタブレット端末の活用においては、使用するソフトウェアやアプリの選択も重要なポイントとなる。また、ICT活用については、その目的によって様々な方法が考えられ、活用の具体例を十分に知っておくことが望ましい。

そこで、本年度もICT活用の具体例について、ICTを先進的に活用されている先生を講師にお招きして講演をしていただく。また、県内小中学校においてICTを積極的に活用している先生方からの実践報告もしていただく。このような会を11月下旬に開催予定である。ICT活用の内容については、現在導入されている機器だけでなく、今後導入が進むと思われるタブレット端末なども取り上げ、これからの教育の在り方を考えることができる内容とする。講師は、札幌市立稲穂小学校の山田秀哉氏の予定である。

【小学校と連携したICT活用を取り入れた授業実践】

今後、県内の小中学校へもタブレット端末の導入が進むと考えられる。現在は、一部の学校に試験的に導入されている段階と思われるが、導入に備える必要がある。タブレット端末の機能や利点を理解し、どのように学習活動に役立つのかを検討しておく必要がある。研究会の開催だけでなく、小学校の先生方とセンターが連携して、タブレット端末の具体的な活用方法について検討を進める。

タブレット端末の活用は、将来的には児童生徒1人に1台の活用になると考えられるが、まず学級に1台だけの場合、どのような活用が可能であるかを考えることも意義があると思われる。そのため、本年度は、教師の教材提示や児童生徒の発表のためのツールとしてのタブレット端末の活用方法等について共同研究を進めていきたい。また、研究の成果については、上記の研究会等で報告を行うようにする。

教育臨床研究部門

【研究および内地留学生の受け入れについて】

今年度の教育臨床部門では、異動に伴い専任教員が1名減少し、准教授1名となった。しかしながら、今年度もほぼ例年同様のプランが計画されている。教育臨床部門では他の部門と同様に、大きく分類すると三つの柱を設定していると言える。一つ目の柱は、現職教員の再教育として年間10名程度の内地留学生の受け入れであり、今年度も同様の人数の受け入れが決まっている。今年度も、内地留学の期間の中で自らの指導や援助について振り返り、今後の教員としての職務に生かしていけるような研修を積んでいってほしいと願っている。4月からスタートした内地留学生の受け入れとして、すでに5名の先生方が精力的に研修を進めている。個人の課題を振り返りつつ、現場に還元できるような研修を行っていく。もう一つの柱は教育臨床部門としての研究にある。すでにスタートしている心理教育に関する研究も3年目を迎え、昨年度は地方紙からの取材も受けるなど、着実に地域貢献に向けて進んでいる。また、子どもの生活における感情の役割に関する基礎的研究も積み重ねられており、こうした研究成果については引き続き国内外に発信していく予定となっている。残り一つの柱としては、学校臨床に関する研修会や講演会の開催である。今年度は専任教員が1名減少となったことから、講演会も年間1回の予定ではあるが、今年度も教育臨床に関する話題を含んだ研修会を開催予定である。昨年度は、教室の中で苦戦しやすい「発達障害」への心理教育についての講演会を年間2回行った。近年は、毎回50名前後の参加者のうちその6割程度を現職の学校教員が占めていたように、研修の主な対象として学校教員を想定した研修会を行ってきた。しかしながら、学校現場をはじめとする子どもの成長に寄り添う仕事は教員だけとは限らない。教育臨床の立場を踏まえ、子どもの心理的成長に寄り添うためには、心理療法や教育カウンセリングの立場からの研修も進めていく必要がある。今年度の予定としては、主として子どもや保護者のカウンセリングを担当する県内のスクールカウンセラーや、現職のカウンセリング指導員を対象とした研修を計画しているところである。

「子どもとつながる力」を高める ―平成27年度内地留学生指導ビジョン―

客員教授 寺西 康雄

教育相談では、相談する子どもと相談に乗る教師とが「信頼の絆」で結ばれたときに、はじめて相談の成果が得られる。将来的にカウンセリング指導員等の教育相談関連業務を担うであろう内地留学生にとって、「子どもとつながる力」を高めることが必要不可欠である。

私にとって「子どもとつながる力」を高める機会となったのは、場面緘黙当事者A君（当時、中3）との出会いであった。言葉でのやりとりが成立しない中での教育相談は大変な困難を伴ったが、私とA君とをつないでくれたツールは「けん玉」であった。けん玉を活用したプレイセラピー（けん玉セラピー）をとおして、1年間、かかわり続けることができた。私と出会うまでは「いじめ」に苦しみ、不登校に陥っていたA君であったが、次第に立ち直りをみせていった。

私は、週1回、内地留学生対象の講義を担当している。内容としては、教育相談について文献講読や発表・討論などを行う演習と、遊びを中心としたプレイセラピーを体験的に学ぶ実習である。

昨年度に引き続き、今年度も、場面緘黙当事者A君を講義のゲストとして招いている。A君とのかかわりとおして、内地留学生1人1人が場面緘黙への理解を深め、支援の在り方を学ぶとともに、「つながる力」を高めることを願っている。

教育研究の学びと交流の場 ―平成27年度の取り組み―

客員教授 安井 俊夫

社会は今大きく変化し、それに伴って教師にも大きな変化が求められている。知識基盤社会の到来によって知識は高度化し、教師にも高度で専門的な知識の習得が求められている。生涯学び続けなければ教師としての仕事ができない、そんな時代が来ている。

そして、それとともに教員養成や教員研修においてもその高度化、専門職化が求められ、その適切な対応が望まれている。教職大学院の構想はまさにそれに応えるものであり、教員養成や教員研修における大学の果たす役割がますます大きくなってきている。これから教師に求められる高度で専門的な知識とその習得、理論と実践の統合等、多くの課題に実践を積む教育現場である学校と理論的研究を進める大学とが一層連携し、互いに交流し学び合うことがとても大切である。

今年度は、学校現場が大学に対してどのようなニーズをもっているのか、どのような支援を求めているのかを把握するとともに、お互いの教育研究を交流し学び合える場の一層の充実に努めていきたい。そしてまた、教育実習指導、「学びのアシスト」におけるメール相談やサポート、教職に関する相談（個別相談等）等、教師を目指す学生への支援についても教員養成という視点からしっかり取り組んでいきたい。

内地留学を経験して

大菱池仁子

「彰往察来」ある小学校の校長先生からの今年の年賀状に書かれていた言葉です。「過去を明らかにし、現在を把握し、それをもとに未来を察知する」という意味であり、教員生活10年目を迎えた自分にとって、過去を振り返る時期にきているのかもしれないと、正月からはっとさせられたことを覚えています。しかし、実際はその後忙しさにまぎれ過去を振り返る余裕のない日々を送っていました。そのような折、思いがけず、内地留学の話をしていただきました。大学の講義や演習では、常に自分の過去を振り返り、これから出会う子どもたちにどのように関わっていけばよいかを考えさせられています。この機会に感謝し、学んだことを現場に生かしていけるようこれからも研修に励みたいと思います。

豊岡 崇志

今でも鮮明に覚えているのは、校長室で富山大学へカウンセリングの内地留学の話聞いたときのこと。あのときは、漠然としていた内地留学。4月から講義や演習を受け、論文や専門書を読み、センターの先生方と話し、内留生同士で語り合い、専門機関を訪問し、講演会に参加して、気が付けば一日が終わっている日々。そして、最近ふと気づいたこと。テレビを見た時、新聞を読んだ時、嫁と話している時、姪っ子と遊んでいる時、つつい頭をよぎるのは、「あの講義の話と似ているな」「論文の内容と同じだ」。そんな自分の姿におかしさを感じながら、何気ない日常に今までと違う視点をもてること、これも内地留学をさせてもらっている意味のひとつなのかもしれません。

山田 朋子

現在の私があるのは、生徒や保護者、職場のメンバーとの「出会い」のお蔭であり、それは私の財産です。教えられ、助けられたこと、喜びや悲しみ、また、心残りのことがありました。

今回、内地留学という機会をいただき、これまでの経験を振り返りながら、新しい知識や情報を学んでいます。また、大学の先生方や異なる校種の先生方と新しく「出会い」、いろいろな考え方を知ることや意見交換、現場を離れることでできる多面的にものを見たり考えたりすること、をしています。この「学び」と「出会い」を教員としての私の財産にするため、充実し、満喫し、楽しみ、発見し、学習する毎日です。

大野 宏子

年度始めの慌ただしい1か月間を学校で過ごし、5月1日からは一転して大学での3か月間の研修。これまであまり立ち返ることなく、とにかく日々過ごすことに精一杯だった学校生活を、講義や演習を受けながら、少し外側から見ている自分に気付く毎日です。大学の先生方からはもちろんのこと、同じ研修を受けている先生方との会話の中で、他市町村、異校種の事情を知ることも多く、刺激を受けています。研修を進めていく中で、これまで実践してきたことにはどんな意味があるのか、子供たちの望ましい成長に向け、よりよい実践となるには、今後どのように取り組んでいったらよいのか、そんな後ろ盾となるものを一つでも多く学んでいきたいと思えます。

寺島 豊和

健康観察、授業、給食、清掃、部活動、行事の指導（という名の注意、小言、いやみなど）の日常から離れて2か月。毎日の講義やゼミなどを受講しながら今までの自分の実践を振り返ると、まさに汗顔の至りです。こういう機会を与えられたおかげで、かつて大学で教わった教員としての心持ちや知識・教養がよみがえるような感じがするとともに、一緒に勉強している先生方にもたくさんの刺激をもらいながら毎日を過ごしています。ふとした時に、担当している（していた）生徒のことを思い出しますが、この貴重な期間で学んだことを今後の教員生活に生かせるよう、そして少しでも子どもたちに返せるよう、一層精進したいと思います。

研究会のご案内

10月9日(金)・10日(土)、第41回全日本教育工学研究協議会全国大会が富山県民会館を主会場に開催されます。大会テーマは、「広げよう学びの世界 Innovation & Challenge in Toyama」です。研究発表、講演、シンポジウムだけでなく、6つの学校による公開授業もあります。本学部の附属小学校、附属特別支援学校も公開授業校となっていますので、ご紹介いたします。ぜひご参加ください。

■ 期 日 2015年10月9日(金)・10日(土)

■ 会 場 主会場 富山県民会館

■ 授業公開校 富山市立芝園小学校 富山大学人間発達科学部附属小学校
富山市立芝園中学校 富山県立富山中部高等学校
富山県立雄峰高等学校 富山大学人間発達科学部附属特別支援学校

■ 主なプログラム

1日目：2015年10月9日(金)

公開授業

基調講演「広げよう学びの世界」 山西潤一(富山大学教授)

シンポジウム「学びの世界を広げるICT活用」

2日目：2015年10月10日(土)

研究発表

学びの世界を広げるワークショップ

講演「学びの世界を広げるICTへの期待」 堀田龍也(東北大学大学院教授)

■ 詳細は大会ホームページをご覧ください。参加申込みもホームページからできます。

<http://jaet2015.jp/index.html>

編 集 後 記

センターニュース33号をお届けいたします。本年度より学部長を務められる鳥海先生から巻頭言を、新しく着任された安井先生、山本先生からもご挨拶の原稿を賜ることができました。

また、各部門等の本年度の計画・ビジョンも紹介することができました。当センターの役割は、高い資質をもった教師を育成すること、学部や大学を教育現場と結び、教育における地域連携機能を果たすことです。これらの目的達成のために、それぞれの取組を進めていきたいと考えております。

今後とも、当センターの活動にご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。(長谷川 春生)



印刷 平成27年7月24日
発行 平成27年7月24日
編集発行 富山大学人間発達科学部
附属人間発達科学研究実践総合センター
代表者 山西 潤一
〒930-8555 富山市五福3190 ☎076-445-6380